

講師・司会者紹介

特別講演

- ◇ 磯 貝 正 義 山梨大学名誉教授

基調講演

- ◇ 上 原 真 人 奈良国立文化財研究所

基調報告

- ◇ 宮 澤 公 雄 帝京大学 山梨文化財研究所

- ◇ 橋 原 功 一 帝京大学 山梨文化財研究所

シンポジウム司会

- ◇ 末 木 健 山梨聖隷文化財センター

天狗沢瓦窯跡の発見と調査の経過

天狗沢瓦窯跡の発見は、1937年に地権者である相川春樹氏とともに羽中田辻雄氏によって布目瓦が採集されたことによる。その後、末木健、佐野勝広氏らによって採集資料が報告されていた。1986年春、桑園の作付け転換の際、末木健氏によって1個の軒丸瓦が採集された。この軒丸瓦は本県初見の形式であり、本県古代史上において極めて重要な発見であり、本瓦窯跡が注目されることとなった。町教育委員会では、作付け転換を期に学術調査を行う方針をかため、遺跡把握のための試掘調査が実施された。その結果、2基の窯跡の存在が確認され、同時に多くの瓦片、須恵器等が出土した。

試掘調査の結果を受け、1987年には2基の窯跡および溝址が調査された。遺構からは多量の瓦と須恵器が出土し、多大な成果を上げることができた。トレンチ調査によって1号窯北東にさらにもう1基の窯跡があることが確認された。

翌年の第2次調査は、前年確認された1基の窯跡と窯場全体を区画する大溝が調査された。

1989年には、本遺跡と出土遺物の一部がその重要性に鑑み、山梨県文化財に指定され、現在遺跡は盛土によって保存されている。

周辺の遺跡

本遺跡のある数島町を中心とした甲府盆地北西部地域は、後期古墳が多く点在している地域としてもよく知られている。本町においても、平坦部において多くの古墳が存在したようであるが、現在では大塚古墳、大庭古墳等が知られるのみである。その中で大塚古墳は、全長8.8mを測る横穴式石室を持つ、大型の古墳であることが調査によって明らかにされている。また、甲府市に属するが、同じ荒川右岸に穴塚古墳が保存状態良好な古墳として史跡指定されている。

本遺跡とは荒川を挟んだ位置にある甲府市千塚・山宮地区は、荒川によって形成された扇状地上にあり、千塚・山宮古墳群が知られているが、現在そのほとんどが消滅している。湯村山南麓には湯村山古墳群が見られるが、うち1基は横石塚古墳である。羽黒山山頂には1基のみであるが、横石塚古墳が知られている。直径30mを越え、本県最大規模の横石塚古墳である。それらの山麓前面には、石室全長16.75mを測り、甲府盆地において第2位の規模を誇る加年郡塚古墳や14.2mを測る初期横穴式石室を持つ万寿森古墳等が存在し、かつて有力な地域であったことを物語っている。

竜王町・双葉町地域においても、両町が接する赤坂台地から登美台地を中心として多くの古墳が点在している。なかでも中央自動車道開設に先立って調査された赤坂台古墳群は大型の古墳も見られ、副葬品として金銅製飾馬具や飾金具等が出土しており注目される。

一方、この地域において、当該期の集落の調査はほとんど行われておらず、古墳造営に携わった人々の実態が明確ではないが、近年ようやく調査が行われ始めており、今後の調査成果に待つところは大きいといえよう。

天狗沢瓦窯跡と出土瓦

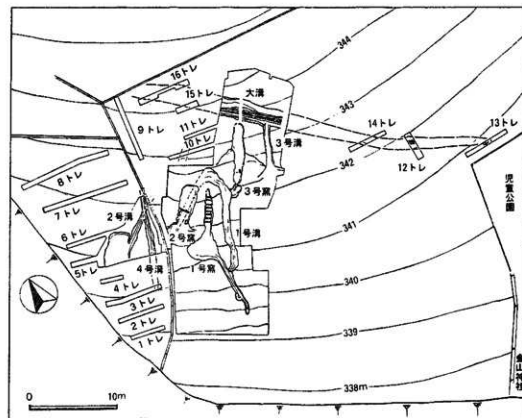
榎 功 一

天狗沢瓦窯跡は甲府盆地をのぞむ天狗沢の台地縁辺部、標高340m付近の南斜面に位置し、3基の瓦窯址と溝址、大溝等が見つかった。遺構のあり方から推定すると、3基の瓦窯址は同時存在したのではなく、比較的短時間に連続して操業していたらしい。1号窯の溝を2号窯が埋めて1号窯と並列し、3号窯は1号窯の右上に接し1号窯の溝に排水管を敷設していることから、大まかには1号窯→3号窯→2号窯の順に変遷したようだ。

(1) 1号窯と1号溝

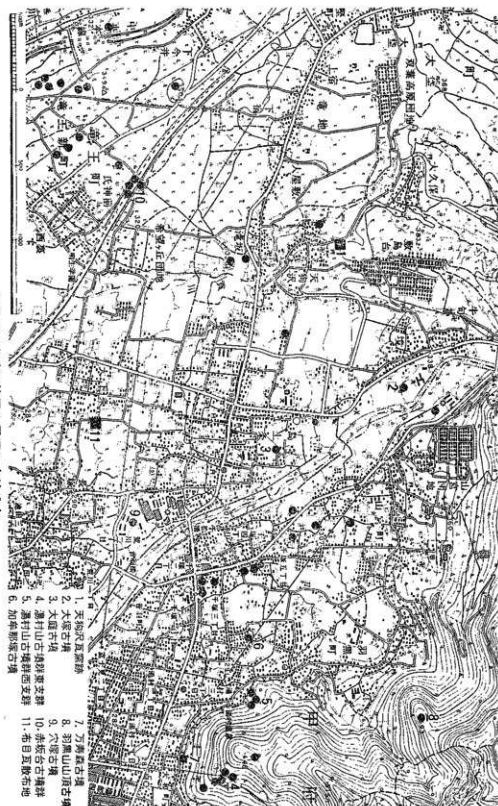
1号窯は地下式窯窯(あながま)で、地中に傾斜をもつトンネルを掘り、瓦を立て並べて焼くための7段の階段を作り出している。この焼成部の前方に排水溝をもつ摺鉢状の前庭部がある。窯の主軸方向はN-35°Eで、斜面の傾斜方向と同じであり、前庭部から焼成部までの長さは8.5m、前庭部と焼成部最上段との比高は2.1mである。

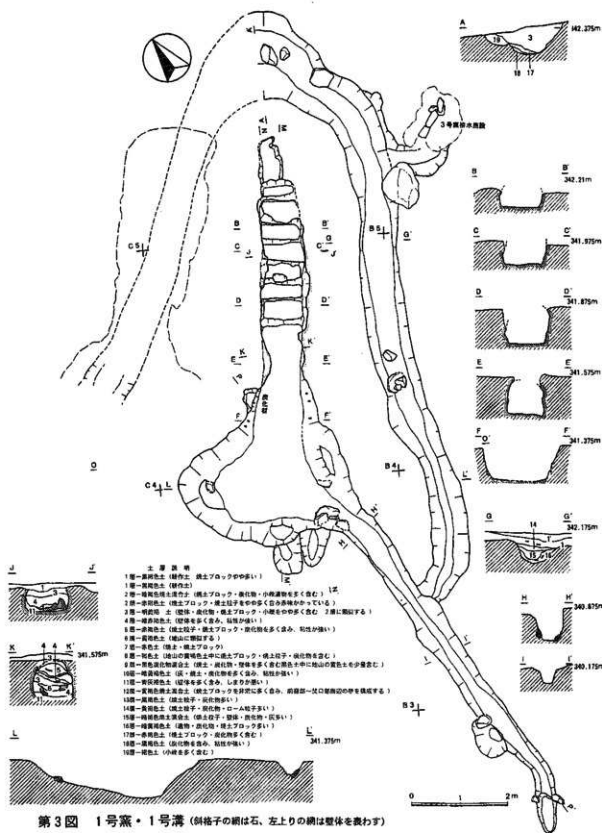
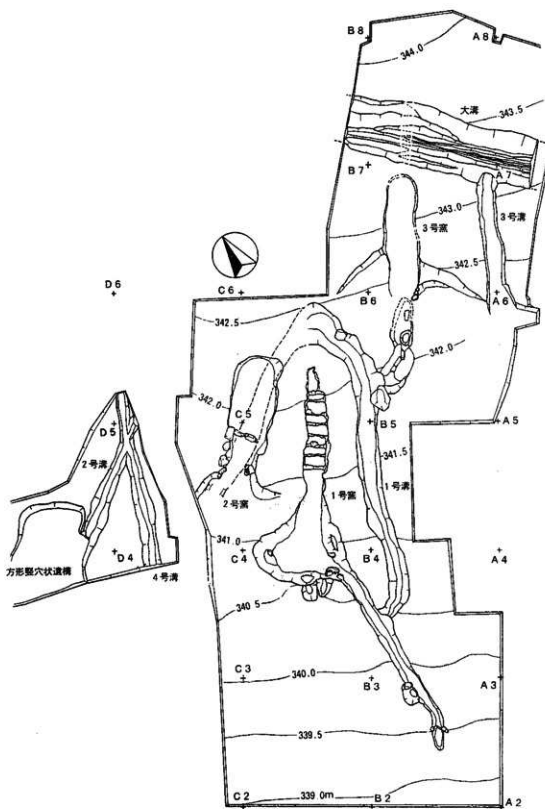
前庭部は、窯入れ、窯出し、燃料供給時の作業空間として、また窯内の灰などをかき出す灰原として利用したもので、3.7×2.3mの楕円形を呈し、深さ1mほど窪んでいる。前庭部には向かって右脇から幅0.4～0.6m、長さ7.8mの排水溝が斜め方向に伸びているが、これは前庭部の排水を目的としている。前庭部と排水溝には炭化物や灰が多量に堆



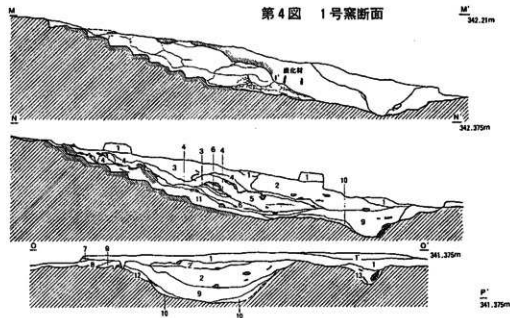
第1図 天狗沢瓦窯跡 全体図

天狗沢瓦窯跡の位置と周辺の古墳分布





第4図 1号窯断面



積し、瓦類のほかには坯を主とした須恵器が出土した。焚口部は特定できないが、前庭部と焼成部が接する両側の壁に、垂直に打ち込まれた炭化材が3～5本見つかっており、焚口部付近の構築材の一部と考えられる。焚口部と焼成部の間が燃焼部であるが、壁面は高温のために溶解・発泡したりひび割れたりしていた。焼成部は幅0.8m、長さ3mで、22°の傾斜がある。段の大きさは幅65～85cm、奥行25～40cm、高さ17～23cm。天井部は完全に崩落し、焼成面上に堆積していた。出土した平瓦は平行叩きで還元焼成のものが主体的であった。

1号窯の周囲には、南側に開いたU字形の1号溝が巡っている。瓦焼成には数日間の日数を要し、その間の降雨対策として窯本体に屋根を取り付けていたと思われるが、さらに溝を巡らして窯に雨水が侵入するのを防いだらしい。幅0.6～1.5m、深さ0.4～0.6で、東側端は1号窯排水溝に接続している。溝西側は溝を埋めて2号窯が作られている。この溝中には廃棄された瓦類や須恵器類が多く見つかった。

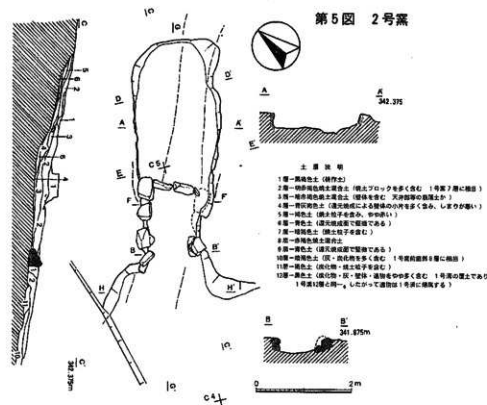
本瓦窯址は前庭部などでの遺物出土状況によれば、瓦を焼く間に須恵器を焼いた、つまり瓦と須恵器を同じ窯で焼成した「瓦陶兼業窯」であったことがわかる。須恵器や瓦文様・技法から7世紀後半の年代が推定できるが、この時期は律令支配の初期にあたり、寺院向けの瓦のほかには官衙に供給するために須恵器を焼成した瓦陶兼業窯が関東各地に出現しはじめている。この瓦窯跡でも坯・甕類の須恵器のほかには円面硯が大溝などから出土しており、官衙の依頼を受けて須恵器製品を生産・供給していたとみられる。

(2) 2号窯

1号窯の西1.8mに位置する半地下式窯で、主軸はN-40°-E。焚口部～焼成部まで4.6m、焚口部と焼成部最上面との比高は0.75mである。

灰原は焚口部前方を平坦に削ったもので、範囲ははっきりしないが、細かく砕けた平瓦

第5図 2号窯



主 要 説 明

- 1号一室焼成土（須恵器）
- 2号一室焼成土（須恵器）と焼成土（須恵器）を焼く（1号窯の焼成土）
- 3号一室焼成土（須恵器）と焼成土（須恵器）を焼く（1号窯の焼成土）
- 4号一室焼成土（須恵器）と焼成土（須恵器）を焼く（1号窯の焼成土）
- 5号一室焼成土（須恵器）と焼成土（須恵器）を焼く（1号窯の焼成土）
- 6号一室焼成土（須恵器）と焼成土（須恵器）を焼く（1号窯の焼成土）
- 7号一室焼成土（須恵器）と焼成土（須恵器）を焼く（1号窯の焼成土）
- 8号一室焼成土（須恵器）と焼成土（須恵器）を焼く（1号窯の焼成土）
- 9号一室焼成土（須恵器）と焼成土（須恵器）を焼く（1号窯の焼成土）
- 10号一室焼成土（須恵器）と焼成土（須恵器）を焼く（1号窯の焼成土）
- 11号一室焼成土（須恵器）と焼成土（須恵器）を焼く（1号窯の焼成土）
- 12号一室焼成土（須恵器）と焼成土（須恵器）を焼く（1号窯の焼成土）
- 13号一室焼成土（須恵器）と焼成土（須恵器）を焼く（1号窯の焼成土）
- 14号一室焼成土（須恵器）と焼成土（須恵器）を焼く（1号窯の焼成土）
- 15号一室焼成土（須恵器）と焼成土（須恵器）を焼く（1号窯の焼成土）

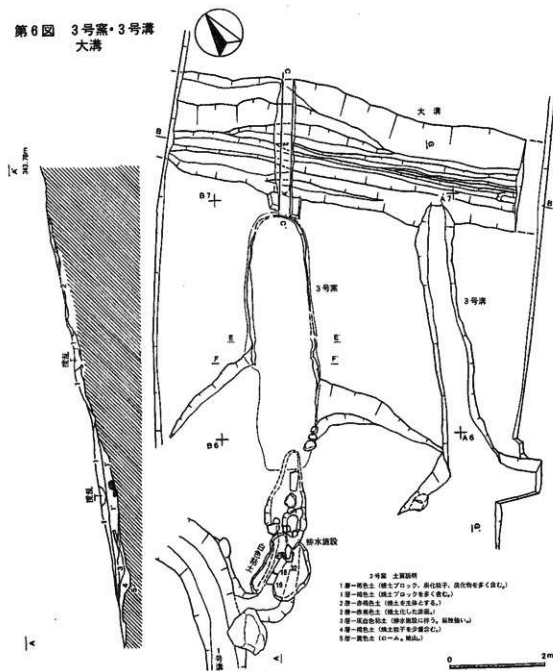
片の広がりが見られた。焚口部は礫を据えて補強しており、幅0.75mである。燃焼部には焚口側に開くコの字形の配石があり、さらに配石の外側にもう1面の壁がある。つまり燃焼部の修復にもない配石を設けたらしい。ふつう、石は焼成時に割れて瓦を傷つけることがあるので、室内に使用することは少ないが、ここでは配石を設けることで燃焼部を区画するとともに、燃焼部と焼成部の間に段差をもたせて熱効率を高めようとしたのであろう。配石内には数枚分の平瓦の大型破片が壁体・焼土とともに重ねて置かれ、配石側面には壁体や溶解した瓦が付着している。平瓦は格子目叩きをもつ。酸化焼成で赤味が強い。焼成部は幅1.7m、長さ2.8mで、3面の還元焼成面をもつことから、最低3回の焼成が考えられる。1号窯と違い焼成部に階段はなく、15°の緩やかな傾斜面をもつ。焼成部からの遺物はたいへん少なかった。

(3) 3号窯と3号溝

1号窯の東上にあり、大溝に窯尻を接し、灰原を1号溝に向けて構築している。主軸はN-34°-E。地山をわずかに掘り留めた半地下式窯である。燃焼部～焼成部の長さは5.3m、幅1.2m。

灰原はハの字状に削平し、灰原中には長さ2.5mにわたり5点の丸瓦を連結し白色粘土で隙を固めて埋め込んだ排水施設を設置している。丸瓦は1号溝に排水するように溝を掘ったうえで埋設していることから、1号溝が機能している段階で設置されたと考えられる。焚口部、燃焼部ははっきりせず、焼成部と同じ傾斜で焼成部へ至っている。焼成部は長さ

第6図 3号窯・3号溝
大溝



第7図 方形竪穴状遺構と2号溝

3.5 mで1°の緩やかな傾斜をもつ。焼成面は2面あり、2次焼成面上には焼合として使用したらしい須恵器片や瓦片がみられた。煙道部分は残っていないが、おそらく大溝のり面を利用していたのであろう。

3号窯の東側には、大溝から3号窯と平行して3号溝を設けている。溝の長さは7.3 m、幅0.8 m、深さ0.2~0.4 m。溝内からは少量であるが瓦類、須恵器類が出土している。

(4) 方形竪穴状遺構と2号溝

東西3 m、南北4 m、深さ0.5 mの隅丸方形を呈した竪穴状遺構である。竪穴内には炭化物や焼土とともに、多量の瓦、須恵器片が堆積していたが、平瓦が1号窯と同種で、しかも1号窯灰原出土の須恵器高杯脚部と竪穴状遺構出土品が接合するなど、1号窯との関係は密接である。おそらく1号窯の不良品を廃棄する場とみられるが、本来は工房等の建物址か、あるいは粘土を貯蔵し、練るための施設かと推定できる。

2号溝は竪穴状遺構に接続する溝である。溝内の瓦はほとんど2号窯と同種の格子目印き瓦で、方形竪穴状遺構の時期よりも遅れるため2号窯段階で構築された溝と考えられ、2号窯を保護するための側溝の可能性もある。

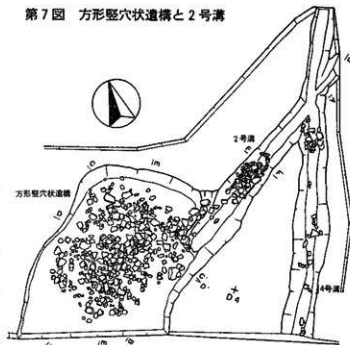
大溝

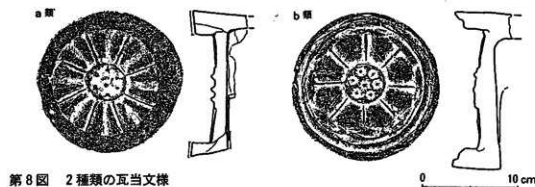
3号窯北側に位置し、調査区内では長さ7.3 mを検出したが、地中レーダや試掘によって、約40 mほど直線的に延びていることがわかった。幅は3号窯附近が最大で2.4 m、断面はV字状で深さ0.9 m。底部には2条の細い溝がある。窯場全体を雨水から保護したものであろうが、規模があまりにも大きい。調査時の観察では、雨があがって数日間はそのり面から水がしみ出し溝底部に溜まっており、地表面に近い伏流水をこの大溝で遮断しているように見えた。断面の土層観察では大溝構築後、少し時間を置いて3号窯の焼土などが堆積していることから、3号窯築設以前、1号窯段階で大溝はすでに存在していたようである。

遺物

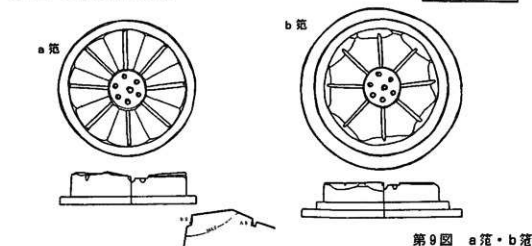
瓦

(1) 軒丸瓦

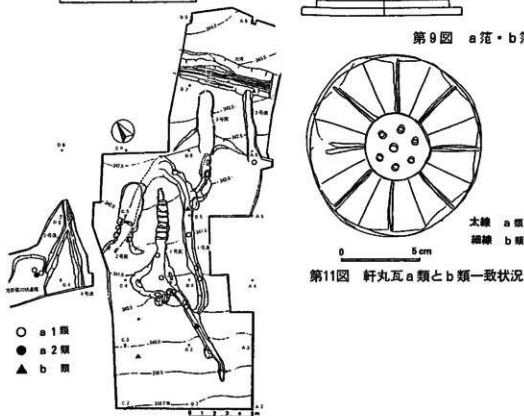




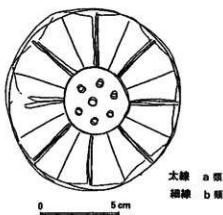
第8図 2種類の瓦当文様



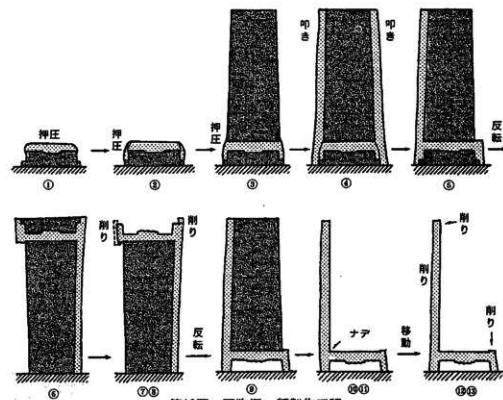
第9図 a 范・b 范



第10図 天狗沢瓦窯跡と軒丸瓦分布図



第11図 軒丸瓦 a 類と b 類一致状況



第12図 天狗沢 a 類製作工程

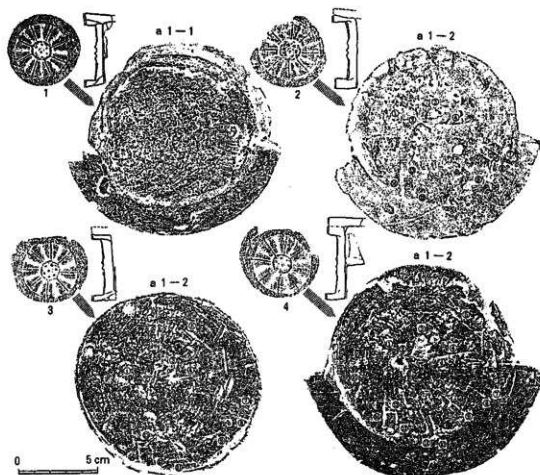
瓦当文様が2種類ある。素縁タイプ (a 類) と段縁タイプ (b 類) であり、瓦当文様も異なるが、両者は本来同一范で a 類から b 類へ改范したことが判明している。

a 類は周縁が幅広の素縁で、内区文様は素弁八葉蓮華文。花卉の端部は周縁内壁に接するため、花卉の捉え方が2通り可能であり、凸弁で中央に鉢状の隆線をもつと見る見方と、凹弁で間弁状の隆線によって各弁が区切られていると見る見方ができる。しかし改范後の b 類をみると、隆線は弁間の区画として用いられていることから、a 類については後者の見方をしておきたい。中房は低く突出し、1+6の蓮子がある。青灰色を呈した還元焼成が多い。

b 類は周縁に段をもつ素弁八葉蓮華文。弁は平坦で、先端は剣先状を呈し、各弁は間弁状の隆線によって区切られる。中房は a 類と同じである。灰褐色を呈す。

製作技法は両者とも瓦当部粘土の裏面上に型木を立て、粘土板を巻き付けて半載し型木を抜く、いわゆる「一本造り」技法であるが、瓦当裏面に布目痕をもつもの、型木の端面圧痕をもつものなどがあり、技法的には3技法に細分できる。

a 1 類技法は型木に直接粘土板を巻き付ける一本造り技法で、丸瓦部から周縁端部まで同一の粘土板で作っている。型木に布を用いないので丸瓦部凹面には布目痕がない。また瓦当裏面には型木端面圧痕が残る、木の年輪がすかにわかる例 (a 1-1 類) と、端面整形時のちよくな痕とみられる傷をもつ例 (a 1-2 類) がある。型木に布を使用しない



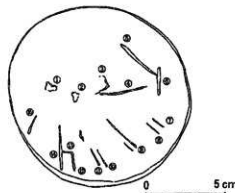
第13図 瓦当裏面の型木広端面圧痕

点是全国的にもきわめて希有である。

a 2 類技法は、型木に布を用いた一本造り技法で、粘土板の巻き付け方は a 1 類と同じである。瓦当裏面には「無紋り」の布目痕がある。

b 類技法は型木に布を用いた一本造りであるが、丸瓦部粘土板は瓦当部周縁に完全には連続せず、丸瓦部と周縁部の間に不明瞭な斜めの接合痕が残る。

出土状況では、a 類22点のうち1号窯内が13点、1号溝内が5点、方形堅穴状遺構内が3点、3号溝内が1点である。b 類は1号溝内が2点、大溝内1点で、しかも1号溝内の b 類は3号窯灰原に近いところで出土している。したがって1号窯で a 類が、3号窯以降



第14図 3の型木広端面の痕

に b 類が焼成されたと考えられ、改竄の順序と矛盾しない。

ところで a 1-1 類と a 1-2 類の型木端面の圧痕であるが、両者は輪郭・径が異なることから、使用した型木はもともと別々であると考えられる。a 2 類に関しては、端面径が a 1-1 類と同一であることから、a 1-1 類の型木に布をかぶせている可能性が高い。瓦当文様は a 1-1 類が最も鮮明であり、a 1-2 類と a 2 類は後出である。b 類の型木端面径はさらに大きい。以上の点を整理して技法の変遷を推定すると次のようになる。

a 1-1 類 (1号窯) → a 1-2 類・a 2 類 (1号窯) → b 類 (3号窯)

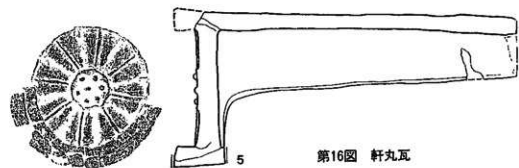
つまり本瓦窯の軒丸瓦製作にあたっては、布無使用段階から使用・無使用併存段階を経て、使用段階に至ったと考えられ、一時型木を2本用意して作業効率を高めようとしていたことがわかる。

a 類の瓦当文様の祖型はなにか。弁間を隆線で区画する点に着目して類例を探すと、長野県明科庵寺、岐阜県杉崎庵寺、滋賀県衣川庵寺がある。中でも明科庵寺1・2類は瓦当裏面に「丸瓦痕跡」をもち、杉崎庵寺例も「丸瓦痕跡」が高く瓦当裏面に布目をもつなど、両者は「一本造り」技法を用いている。年代的には衣川庵寺例が最も古く、620～640年頃位置付けられるという。ただ製作技法は接着法である。また a 類の「一本造り」の類似技法で白鳳時代のものとしては、本瓦窯、杉崎庵寺、明科庵寺の他に檜木原瓦窯・南滋賀庵寺（滋賀県）、三ツ塚遺跡（兵庫県）など少数例が知られているのみである。南滋賀庵寺は大津宮時代（667～672年）の創建とされ年代が比較的明らかであるが、おそらく衣川庵寺のモチーフが南滋賀庵寺の「一本造り」技法を採用して杉崎庵寺、明科庵寺を経る中で

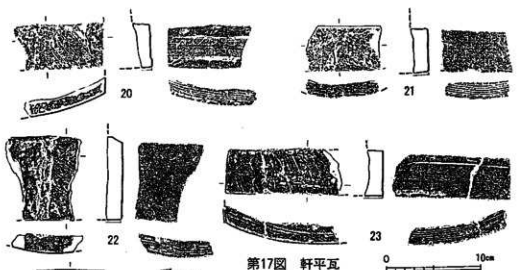


第15図 天狗沢 a 類の祖型

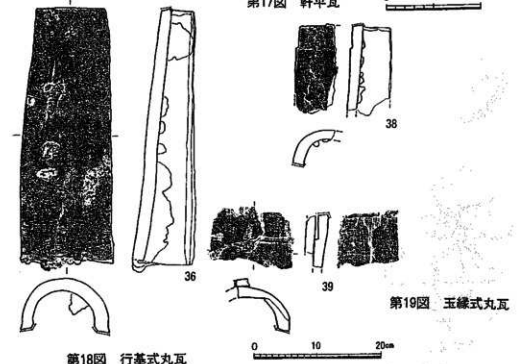
1. 衣川庵寺
2. 杉崎庵寺
3. 明科庵寺
4. 天狗沢瓦窯跡
5. 南滋賀庵寺
6. 上檜木庵寺



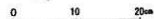
第16図 軒丸瓦



第17図 軒平瓦



第18図 行基式丸瓦



天狗沢にもたらされたのであろう。したがって技法から推定する天狗沢瓦窯 a 類の年代は 7 世紀第 4 半期 (675-700 年) 頃であろう。なお関東地方で「一本造り」は 8 世紀初頭以降に群馬県上植木廃寺などで散見されるようになるが、南滋賀廃寺、杉崎廃寺、明科廃寺、上植木廃寺と、どうも東山道を東へこの技法は伝播したらしい。本瓦窯も東山道ルートでの技術導入がはかられたと考えられよう。

(2) 軒平瓦

軒平瓦の頸部片が 10 点ほどある。すべて素文段頸形式で、頸部が平瓦部から剥離したものである。1・3 号窯周辺での出土が目立つ。

(3) 丸瓦

行基式丸瓦と、狭端部に玉縁状の段差をもつ玉縁式丸瓦がある。

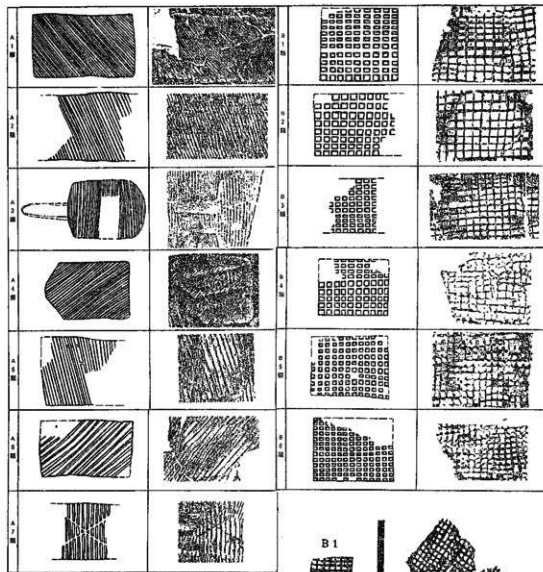
行基式丸瓦は型木に粘土板を巻く粘土板造りで、粘土円筒を縦に半載している。全体をうかがうことができる資料は少ないが、広端幅 14-15cm、狭端幅 10cm、長さ 39-47cm である。

玉縁式丸瓦は、通常の行基式丸瓦狭端部を幅 3.5-4cm、深さ 3-5mm ほど帯状に削ったもので、2 点だけ出土している。特殊な位置に用いるための瓦と思われるが、最近埴崎市宮ノ前第 2 遺跡で出土した玉縁式丸瓦は、天狗沢瓦窯のそれと類似した形態であった。

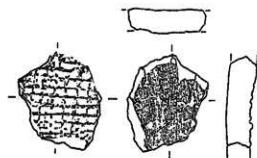
(4) 平瓦

桶状の円筒に粘土板、もしくは粘土紐を巻き上げる桶巻き造りで、桶型をはずし円筒を 4 分割することによって 4 枚の平瓦を同時に作ることができる。出土した平瓦はすべて桶巻き造りであり、甲斐国内では 8 世紀中ごろから出現する「1 枚作り」技法は皆無であった。凸面には叩き目がみられるが、観察の結果、平行叩き (A 類) 7 種、格子叩き (B 類) 6 種の計 13 種類を識別することができた。また叩き目をもたない無文もある。(C 類)。各遺構での状況は、1 号窯で A 類が、2 号窯で B 類が主体をなし、大溝、3 号溝、方形型穴状遺構で C 類が主体的である。

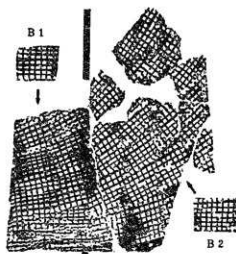
瓦の大きさは、各類ごとに一定の規格がありそうであるが、それぞれの類型が使用した桶型の大きさの違いに起因すると思われる。また桶型に使用した布袋を識別するために、叩き板の分類ごとに布目痕の縦横の布目本数を調べると、大きく A 類と B 類で 2 大別できるが、さらに瓦の厚さのデータを加えて細別できる。瓦の厚さは粘土板を切る道具の違いを反映したものであるから、平瓦を製作した工場の識別も可能になるのではないと思われるのである。叩き板の分類を布目・厚さに基づき細別すると (A1)、(A2・A7)、(A3・A4)、(A5・A6)、(B1・B2)、(B3・B4)、(B5・B6)、(B7) のグループ分けができる。これらを仮に工房と想定すると、1 号窯段階、2 号窯段階ではともに 4 箇所の工房が存在したことになる。この点に関して、1 枚の瓦に 2 種類の叩き目が認められる「重叩き」のあり方がたいへん興味深い。現在までに (A1+A4)、(A3+A4)、(A3+A7)、(A5+A6)、(B1+B2)、(B3+B4)、の組合せを確認しているが、重複叩きの分析によって工房の実態に迫ることができるかもしれない。この重複叩きには 1 枚の平瓦を縦割りにするように左右で叩き目が異なる



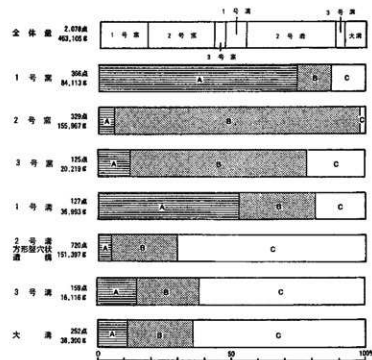
第20図 叩き目の分類



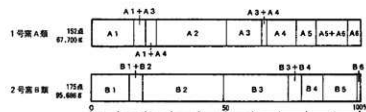
第21図 宮ノ前遺跡出土 B1類瓦



第22図 重複叩きの一例 (同時叩き)



第23図 平瓦の出土量



第24図 A類とB類の出土量

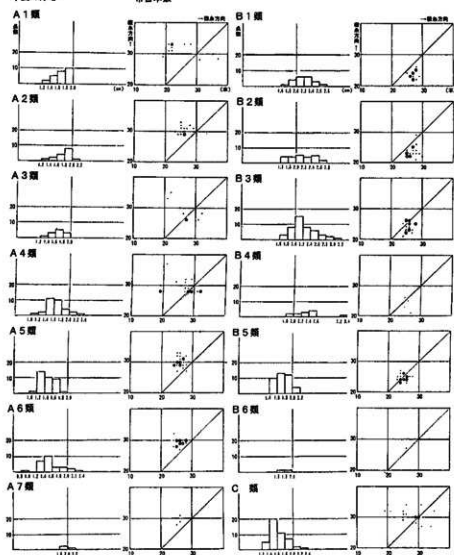
もの(重複A)、主体となる叩き目に補足的に重複するもの(重複B)、全面的に重なるもの(重複C)3種類がある。この中で重複Aに関しては工房内で桶型 はさんで2人の工人が向かい合い、同時に叩きを行なった場合もありうる。

なお分割の際、本瓦窯では凸面側から分割線を入れて分割しているが、中には凸面に沈線によるガイドラインを引いている例がある。通常は凹面側から刃物で切るといわれており、凸面から切る技法は珍しい。

天狗沢瓦窯の瓦はどこへ供給されたのだろうか。葦崎市宮ノ前遺跡で奈良～平安時代の大集落を調査した時に、平安時代の住居床面上からB1の叩き目をもつ歪んだ瓦片が出土した。実際には使用されなかった不良品と思われるが、この発見で寺院の手がかりを得た気がした。宮ノ前遺跡は8世紀初頭から11世紀末で継続した巨麻郡内でも中心的な遺跡のひとつで、郷あるいは郡レベルの役所に関わる性格をもつ。したがって現段階では、葦崎市藤井平付近も供給先の候補地のひとつとして考えている。

平瓦の厚さ

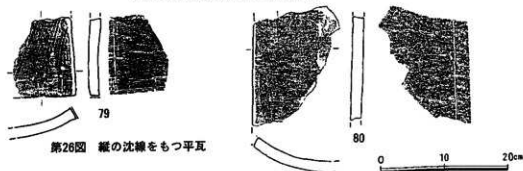
布目本数



第25図 叩き板の分類による平瓦の厚さと布目本数 (3cm×3cm)

●は1点、◎は2点、●は3点以上を数む。

(A-C類は1号瓦、B類は2号瓦で測定した。)



第26図 縦の沈線をもつ平瓦

天狗沢瓦窯出土の須恵器

宮澤 公雄

本瓦窯は瓦陶業窯であり、多量の瓦片に混じって須恵器も出土している。須恵器は窯の構造およびその出土状態から、すべて1号窯で焼成されたものと推定される。しかし、調査によって出土したものの、層位的に検討を加えることができるものはなかった。そのため、各器種ごとに概観していくこととする。

坏身 (第27図 1~34)

大きくは底部に高台を持たないもの(坏A類)と、高台を有するもの(坏B類)に分けることができる。坏A類にはやや丸底で体部が丸みを持つもの(坏A1類)、直線的に立ち上がるもの(坏A2類)、平底に近く外反しながら立ち上がるもの(坏A3類)、口径が大きく器高が低いもの(坏A4類)に分けることができる。そのうち坏A1類には内面口縁端部直下に沈線もしくは稜を有するものがみられる。

坏B類は資料的には僅かであるが、多くがややハの字上に高台を付している。底部が高台部を凌駕するまでは至らないが、ほぼ接地するもの、ほぼ平底で高台が低いもの、高い高台を有するものなどがある。

ちなみに、立ち上がり・蓋受けをもった坏身は確認されていない。

坏蓋 (第27図 35~47)

内面にかえりを有するもの(坏蓋A類)とかえりを持たず口縁端部を下方へ折り曲げただけのもの(坏蓋B類)に大別される。坏蓋A類は比較的小型のものが多く、かえりが口縁端部より突出するもの(坏蓋A1類)、かえりが口縁部よりかなり内側に小さく付けられたもの(坏蓋A2類)に分かれる。

坏蓋B類は小型のものと大型のものがみられる。小型のものは天井部が丸みを持つものである。大型のものには天井部が弧を描くものとやや外反きみになるものがみられる。

高坏 (第28図 1~5)

坏部から脚部までみられる資料は少ないが、坏部の形態は坏A1類に類似するものである。脚部は緩やかに外に開き、端部は下方に折り曲げている。沈線等はみられない。

高盤 (第28図 6~9)

高坏に比べ坏部が浅く皿状になり、脚部は大型でやや低いものが付される。底部はやや丸みをもって立ち上がるものと、明瞭に屈曲して立ち上がるものとがみられる。坏部外面屈曲部付近には沈線が巡る。

罐 (第28図 10~16)

体部および底部が丸みを帯び、胴上から肩部にかけて斜め上方に突き出した注口部を持つ。肩部下には二条の沈線間に櫛描波状文を施すものもみられる。

壺 (第2図 17・18・20~23)